



写真右から、校長・佐々井宏平先生、教務部・百田洋先生、司書教諭・伊吹侑希子先生、教頭・山田尊文先生。

建学の精神「世界を舞台に自分の意志で行動する」をまずは教員が体現

学校・社会をつくる主体者として挑戦し、学び合いSDGSを切り口に学校全体のキャリアキュラム改革へ

教員の姿を見て生徒は育つ

京都学園高校は生徒数1300人を超す大規模校だ。グローバルリーダーの育成を目指す「国際コース」、理数教育に重点を置く「特進ADVANCEDコース」、文武両道に対応した「特進BASICコース」、多様な進路をサポートする「進学コース」という普通科4コースを設置し、それぞれで特色ある教育を実践している。学校運営の方針について、佐々井宏平校長はこう語る。

「社会の動向や国の方針をしっかりと捉えることは大切です。同時に、教育実践の主体者として、我々だからこそ何ができるのかを常に考え、先陣を切つて新しいことに取り組む学校であり続けたいと考えています」

なかでも重視しているのが、「世界を舞台に自分の意志で行動する人」を育成するという建学の精神だ。そんな生徒を育てるためには、まず教員がそれを体現することが必要だという。

「学校の方針だから」「校長が言うから」ではなく、教員一人ひとりが「私が京都学園を創るのだ」という当事者意識をもつことが大切。生徒のためになることは何でもやってほしい。生徒はそんな大人の姿を見て育つのですから」
(佐々井校長)

山田尊文教頭も「どの先生にもやってみたいと思うことがあるはず。挑戦して失敗することより、失敗を恐れて挑戦しないことこそがリスク」と挑戦を後押しする。

そんな環境の下、教員はすすんで学校外の研修に学びに行き、新しい教育方法を模索。また自ら手を挙げて海外へ飛び、現地視察や学校連携の交渉にあたっている。「誰かが率先して実践例を作ることで、次への展開も見えてくる。大きな動きの第一歩として行動していきたい」と語る百田洋先生も、調べ学習に近かった理科探究プログラムをてこ入れし、スウェーデンの学校を訪問して生徒同士の協働プロジェクトを実施するなど行動を起こしてきた。そ

良い取組を共有し学校全体のレベルアップへ

一方で、学校全体としての動きには課題感があつたという。

「良い取組がなかなか学校全体に広がらず、『あのコースは特別』あの先生だからできた』で終わってしまうことも。学校を次のステージに引き上げていくためには、教科やコースの枠組みを超えた教員の学び合いが必要でした(山田教頭)」

そのための仕掛けの一つが、中高の全教職員約90人が参加して行う「教職員リトリート大会」だ。2016年度より毎年、夏休み期間中に実施し、新しい実践やその成果、国内外の研修で学んできたことについてワークショップを交えながらシェアしている(図2)。

「各先生が自らの強みを見つけ挑戦している様子から、自分はどうな方向で力を発揮していくかを考え始める先

図1 各コースの特長的な取組



学校データ

1925年開校／普通科／生徒数1329人(男子766人・女子563人)※高校のみ的人数／進路状況(2019年3月卒業)大学366人・短大17人・専門学校46人・就職10人・留学16人・その他32人

取材・文／藤崎雅子



図2 「教職員リトリート大会」プログラムの例(2019年度)

テーマ: はじめよう、総合的な探究の時間

1 実践報告(120分)

- ・「KOA Global Studies」(国際コースの探究)での取組
- ・SGHの取組とその成果
- ・SDGsをテーマとした図書館教養講座の取組

2 ワークショップ(90分)

※a～cのいずれか一つを選択して参加

- ・a: SDGsカードゲーム
(「世界一大きな授業」での実践)
- ・b: クエストエデュケーション
- ・c: ロボット「Pepper」を用いたプログラミング



ワークショップでSDGsカードゲームを体験。

3 実践報告(50分)

- ・「地球学」(中学校体験学習)の取組
- ・「Science Global Studies」(特進ADVANCEDコースの探究)の取組

生も多いようです」(山田教頭)

また、もう一つの仕掛けが、17年度に始めた、学校全体で共通のテーマを置いて取り組む授業改善だ。年度始めに設定した研究テーマに沿って、各教科が年間指導計画を策定し、授業研究に取り組み(図3)。「公開授業研究会」も開催し、外部の教育関係者も交えて学び合う。

「特定分野の研究発表と違い、すべての教科が対象となるのがポイント。全教員が当事者として授業改善に取り組んでいます」(山田教頭)

図3 授業改善の研究テーマ

2017年度	「主体的・対話的で深い学び」の視点に立ち、質の高い学びをめざす
2018年度	社会が変われば、授業が変わる ～新学習指導要領を見据えて～
2019年度	授業が変われば、社会が変わる ～京都学園中高で取り組むSDGs～
2020年度	STEAM教育 ～SDGsの視点を踏まえて～

学校のさまざまな学びと社会をSDGsで紐づける

学校全体の動きを大きく加速させたのが、19年度研究テーマにSDGs(持続的な開発目標)を取り入れたことだ。SDGsにいち早く着目し、希望生徒向けに行ったワークショップで手応えを感じていた司書教諭、伊吹侑希子先生が推進役となった。

「未来の社会を担っていく子どもたちだからこそ、社会とつながっているというリアルな感覚をもって学校の学びに取り組んでほしい。そのきっかけにSDGsを使うことで、教科ごとではばらばらだった学びを一本に紐づけることができ、生徒の学びの幅が広がるのではないかと考えました」(伊吹先生)

伊吹先生は独自にSDGsについて学び、情報収集においてどの教科にも

関わりのある図書館という立場から、各教科の授業作りを支援。他の教員も、自ら校外の勉強会に参加してヒントを得るなどし、新しい授業を作った。例えば数学では、所得格差を数値化する投資ゲームを通じて、格差の生まれる原因とその対策を考察。美術では環境に優しい素材による版画制作から環境問題を考えた。また、書道を取り入れながら和歌からジェンダーを読み解く、国語科と芸術科の教科横断型授業なども実施された。

教員も、生徒も、主体的に挑戦する文化に

SDGsによる授業改善が進んだポイントには、「面白い」という。

「教員が本気で面白いと思って授業を行うことで、生徒が楽しく取り組み、他の教員にも伝播した」(百田先生)

さらに生徒も、SDGsをきっかけに授業外でも活動をするように。図書サークルの生徒は、食堂のプラスチックごみ削減の呼びかけや、災害発生時の行動について学ぶカードゲームの考案など、自分たちに何ができるか考え行動している。また、ザンビア共和国を訪問した教員の話に触発された生徒が立ち上がり、不要となった文房具を集めて同国に送る教育支援活動を行った。

そんな状況を見て、山田教頭は「教員も、生徒も、主体性をもってチャレンジする。そんな学校の文化が醸成されてきた」と実感。伊吹先生は「これこ

図書サークルの生徒が開発した災害ミッションゲーム。カードを使って、災害発生時にどんな立場の人が何を使ってどう行動すると良いかを考える。



ザンビア共和国の学校の先生と生徒が、2019年に京都学園を訪問。交流の始まりは、美術の教員の現地視察によるもの。

そが学校の価値。生徒には知識をつけるだけではなく、人が集まる学校だからこそできる経験をたくさんしてほしい」との思いを強めているという。

20年度は研究テーマに「STEAM教育」を掲げた。SDGsの取組をベースに、これからの社会ではどの分野でも必要となる科学と芸術の視点を取り入れ、来年度に学校法人の合併を予定している京都先端科学大学とも連携しながら、さらなる授業改善に取り組む。こうして、教員が目標をもって挑戦し、互いに学び合う。その積み重ねで、同校は進化を続けていきそうだ。